

〔巻頭言〕

## リスク社会のなかでの家族看護学の役割

日本家族看護学会理事長

(高知県立大学 副学長)

野嶋佐由美

社会現象を語るときに、次元や局面は異なろうとも、家族の視点は常にそのなかに含まれている。社会学者のベックが現代社会の特徴を「リスク社会」と称して以来、多くの学識者が「リスク」「安全」について論じている。我が国においても、リスク社会を生き抜く方略について様々な学術領域で検討されている。日本学術会議は「リスクに対応できる社会を目指して(2010年)」「防災・減災に関する国際研究の推進と災害リスクの軽減—仙台防災枠組・東京宣言の具体化に向けた提言—(2016年)」「持続可能な地球社会の実現をめざして—Future Earthの推進(2016年)」を、科学技術・学術審議会は「リスク社会の克服と知的社会の成熟に向けた人文学及び社会科学の振興について(2012年)」を、安全・安心科学技術及び社会連携委員会は「リスクコミュニケーションの推進方策(2014年)」を公表している。このように、世界レベルでリスク社会は認識されるようになり、喫緊の課題として英知を結集して取り組まれている。資源・富の分配の課題を、リスク社会も当然抱えているが、リスクはすべての者に波及し、リスクに対して安全なもの存在しなくなるという「ブーメラン効果」を内包している。したがって、リスクに対しては社会全体での対応策が求められている。リスク研究で取り上げられているすべてのリスクが家族に関わっており、家族もまたこれらのリスクにさらされている。

看護学はその誕生とともに、「家族」を視野に入れた実践や看護学の構築を行っており、家族に対してケアを提供するという重要な役割を担ってきた。看護は個人・家族・地域を対象とすることを前提としていることから、看護師には家族に対するケアも実践するという重要な使命がある。そして、「学士課程

においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」(日本看護系大学協議会ホームページ)に示されているコアとなる看護実践能力からすると、家族の尊厳を守り関係性を構築する能力や、根拠に基づき健康問題を抱える家族員そして家族をアセスメントし、必要なケアを組み立てていく能力、特定の健康課題を有する家族員及びその家族に対して適切な看護ケアを提供する能力、家族ケアをマネジメントしチーム医療づくりをする能力などが、家族ケアに関わる実践力として求められている。さらに、家族支援専門看護師のみならず高度実践看護師(専門看護師, Nurse Practitionerなど)は「個人、家族及び集団に対してケアとキュアの融合による卓越した看護実践を提供し、対象の健康増進、治療・療養過程の管理に責任を持つ、看護学の大学院教育を受けた看護師」として位置づけられており、当然家族に対して高度な実践を展開する責務があることとなる。

家族看護者は、以上のような能力を有する看護師であるがゆえに、これまででも、家族に関わる健康リスクに対してその能力を発揮し、リスク予防、軽減に貢献してきた。今後は、従来の狭義の健康リスクのみならず、家族に関わる多様なリスク対応に対してコミットメントが求められている。例えば、家庭内での「リスクコミュニケーション」の活性化なども身近な課題であり、看護者が関与することにより、リスクに関するコミュニケーションと状況の認知が深まり、家族員及び家族のリスク意識を高めることができるであろう。このように、家族看護学に関わる教育研究者・実践者には、リスク社会のなかで、家族がさらされているリスクに対して、家族と協働して対応策を考案し、リスク軽減に向けて取り組んでいくことが求められていると言えよう。